

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 タン ソウチャイ
陳 素彩

本論文は、インド仏教思想史において最も代表的な教理体系を作り上げた説一切有部の関連論書の中でも、以後の仏教思想の展開に決定的影響を与えたヴァスバンドゥ(世親 400-480 頃)によって著された『俱舎論』の第5「随眠」(anuśaya)章を中心として、六随眠(煩惱)の一つに位置づけられる見(drṣṭi)に焦点をあて、主に概念史的な観点から考察を加えたものである。

当該のテーマに関する従来の研究は、有身見、辺執見、邪見、見取、戒禁取の五見に分類される見を、個々に、そしてまた『俱舎論』とともに、正統有部の立場から同論に批判を加えたサンガバドラ(衆賢 -450-頃)作の『順正理論』を主要なテキストとして論及するのが通例であった。また、『俱舎論』については、1967年にP. Pradhanによりサンスクリット校訂本が出版された後は、真諦訳、玄奘訳、あるいはペルツェク等によるチベット語訳を適宜対照させ、またヤショーミトラ(称友 6-7C 頃)注を参照しながら同本を読解し、ヴァスバンドゥの意図を考察するという手法が一般的にとられてきた。

これに対して本論文は、当該箇所(AKBh ad vv.1-11)について、現存する唯一の写本に遡って批判的な校訂テキストを作成したうえで、詳細な訳注研究を行うとともに、関連する漢訳およびチベット語訳の対応箇所の再校訂本を作成し、これらを基礎として、綿密な考証を行っている点に大きな特色をもつ。そのうえで本研究は、有部の最初期の論書である『集異門足論』『法蘊足論』から『毘婆沙論』『大毘婆沙論』、さらには『阿毘曇心論』等の『俱舎論』より少し前の諸論書、および以後の『順正理論』に至るまでの関連する論書の比較考察を行いながら丹念に考察を加える。

序論を除く本論は有身見、辺執見、邪見、見取、戒禁取の五見それぞれに各一章が当てられ、上記の方法をもとに、既存の研究に対する批判的な考察を交えながら論を進める。なかでも第2章「説一切有部における sat-kāya-drṣṭi(有身見)の概念」では、従来未決着であったヴァスバンドゥの解釈(壊れる集合体[である五取蘊]に対する[我れ・我がものとみる]見)を明確化し、併せて有部の解釈(存在する集合体[である五取蘊]に対する[我れ・我がものとみる]見)との対比を通して、『順正理論』の論敵の位置づけに関する新説(ヴァスバンドゥでなく譬喩者とする説)を提示し考証する。とともに本論文は、第2章から第6章までになされた五見それぞれの考察を通して、五見の内容には、従来論じられてきたような重複はなく、むしろ截然とした定義のもとに次第に体系化が図られていった経緯を、論書の成立年代に沿って詳論している。

説一切有部の煩惱論に関しては、論者も認めるように、「随眠」の章全体の考察とともに、関連する諸論書を比較考察する作業が求められる。それだけに今後の研究の余地も大きいといえる。しかしながら、そのような作業を遂行するうえでも、論者が本論文を通して確立した手堅い研究方法とその成果は十分に評価に値するものであり、今後の有部アビダルマの研究に新たな視点と方法を提供するものとなっている。一部に形式的な不備などが見られるものの、本論文がもたらした成果は大きく、博士(文学)の学位を授与するに相応しいと判定する。